城崎にて、殺人

新装版

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章　第二の殺人　7
第二章　三朝温泉　41
第三章　松江　74
第四章　ジュエリー広瀬　107
第五章　男と女　136
第六章　銃声　168
第七章　遺書　200

城崎にて、殺人

第一章　第二の殺人

1

今の岡田利夫の楽しみは、旅行と、カメラだった。

岡田は、警視庁を定年退職したあと、東京新宿に本社のある警備会社ＳＯＳに、就職した。

現在は、この会社の品川支社の責任者になっている。

岡田には、子供が二人いるが、長男も、長女も、すでに、結婚してしまっている。妻の保子（やすこ）と、これからは、二人だけで、ゆっくりと、残りの人生を楽しもうと、いい合っていたのだが、その妻が、心臓発作で倒れ、あっという間に、あの世へ行ってしまった。

たぶん、自分の方が先に死んで、保子に、葬式をあげてもらうことになるだろうと思っていたのに、それが、逆になってしまった。

よく、連れ合いより、先に死んだ方が、幸せだというが、岡田は、その言葉を、噛みしめることになった。

たったひとりになってしまった、何ともいえない孤独感の底で、岡田は、喘（あえ）いで、過ごした。

二人の子供は、心配して、一緒に住むようにいったが、それに甘えられる岡田の性格でもなかった。

酒を呑んだことのなかった彼が、アルコールを口にした。が、体質的に受けつけなかったのだろう。ただ、吐くばかりだった。

その岡田が、何とか立ち直れたのは、前から、趣味にしていた旅行とカメラである。

旅行が、彼の気持を、解放してくれた。特に、保子が亡くなったあと、最初に行った四国では、遍路をして、歩いて廻ったのが、彼を立ち直らせる結果になったといってもいい。

その時、彼と同じように苦しんでいる人たちに出会った。一人息子を交通事故で失った夫婦、夫を脳溢血で失った妻、どう生きるかわからなくなった青年、そんな人たちである。

彼等と話しながら、遍路道を歩いている中に、岡田が気付いたのは、苦しみ、悩んでいるのは、自分だけではないということ、生きていくには、それに耐えなければならないという平凡な事実だった。

それから、休みがとれると、岡田は、カメラを片手に、日本全国を旅行することにした。もともと、旅行が好きだったのだが、四国遍路の旅の後では、旅行する気持が、違ってきた。

昔は、妻と二人だけの旅を楽しむか、一人のときは、孤(ひと)りの旅を楽しんだものだが、なるべく、旅先で、人と知り合うことに努めるようになった。還暦を過ぎた岡田は、あと、せいぜい、十年ぐらいしか生きられないだろう。それを思い、なるべく多くの人と知り合いたいと、思うようになったのである。

四月上旬、土、日を合せて、五日間の休みが取れたので、岡田は、山陰へ行くことに決めた。

山陰は、初めての旅である。

地図と、観光案内を調べて、およその計画を立てた。若い時は、反対に、行き当りばったりの旅を楽しんだものだが、もう若くはないし、時代も変ってしまった。

例えば、彼の二十代の頃は、鈍行列車が、いくらでも、走っていた。旅館に泊れなければ、鈍行に乗り、列車の中で寝て、次の朝、次の場所に移ることが出来た。固い座席で眠ることも平気だったが、今は、それだけの体力もなくなっているし、長い距離の鈍行は、ほとんど、走っていない。

だから、計画を立て、旅館、ホテルの予約もとっておかなければならなくなった。

四月八日。

城崎（きのさき）の旅館に予約しておき、岡田は、東京駅から、新幹線「ひかり」に乗った。

京都で、特急「きのさき5号」に乗りかえる。この列車は、一三時二五分京都発である。

岡田は、京都駅で、駅弁を買い、きのさき5号に乗るとすぐ、それを広げ、遅い昼食になった。京都風の二重になった懐石弁当である。

ウィークデイなのと、学校が始まったこともあってか、車内は、空（す）いていた。駅弁を食べ終って、空になった箱と、ウーロン茶の空カンを捨てに、席を立った岡田は、自分が、誰かに、見つめられているのを感じた。

ドアの近くに座っている若者が、じっと、岡田を見ているのだ。

気のせいかと思ったが、岡田がデッキのゴミ箱に捨てて、戻ってくると、また、同じ若者が、見つめていて、急に立ち上がると、

「ＳＯＳの人じゃありませんか？」

と、声をかけてきた。
「そうです」
岡田は、肯(うなず)いた。が、その若者に、記憶がない。
「やっぱりね」
青年は、安心したように、微笑した。
「私は、あなたを知らないが――」
「そうでしょうね。僕は、新宿の宝石店で働いているんです。新宿東口のジュエリー広瀬という店です。一月に、フェスティバルをやったとき、SOSから、警備の人を呼んだ。その時、あなたも、来ていたでしょう。さっきから、どこかで見た人だと思いながら、思い出せなくて、悩んでいたんです。そういうことになると、気になって、仕方がない性分なもので」
「ええ。確かに、一月末に、東新宿の宝石店に、警備に行きました」
大きな宝石店だった。男女合せて、十二、三人の店員がいる店で、ジュエリー・フェスティバルと銘うって、三日間にわたって、高価な宝石を展示した。その警備のために、SOSから三名が派遣された。岡田も、その中の一人だった。
岡田は、展示された宝石と、客の方にばかり、眼を光らせていたので、店員の顔は、店長しか覚えていなかった。
(こんな知り合い方もあるのか)
と、岡田は、思い、
「どこまで行くの?」
と、きいた。
「城崎です」
「僕も、城崎へ行くんだ」

「自己紹介させて下さい」
と、青年は、名刺を、岡田に差し出した。
〈「ジュエリー広瀬」販売部　北野　敬〉
と、あった。
岡田も、相手に、名刺を渡した。そのあと、北野がリュックを持って、岡田の隣りの座席に移ってきた。
北野は、話好きで、宝石販売にまつわる裏話などを、面白おかしく喋った。
（一期一会）
という言葉を、岡田は、思い出した。四国で、遍路旅をしている時は、絶えず、一期一会という感じで、さまざまな人と会ったが、この北野という青年も、また、その一つと考えていいのではないか。
一期一会といっても、大げさなことではなく、この年齢になると、一つ一つの出会いを、大切にしたいと、岡田は、思うようにしているのである。
城崎で泊る旅館は、違っていた。
「僕は、大学時代に一度、城崎へ行っているんです」
と、北野は、いった。
「私は、初めてだ」
「旅は、初めての方が楽しいですよ。二度、三度となると、それだけ感動が、どうしても、うすれてしまいますからね」
「だが、それでも、また、城崎に行くのは、何か楽しい思い出があるんじゃないの？　大学時代の彼女が、城崎に住んでるとか」

岡田が、いうと、北野は、笑って、
「実は、アルバイトなんです」
「しかし、あんな大きな宝石店に勤めているじゃないか」
「高い宝石を扱ってますが、給料は、安いですよ。だから、旅行を利用して、アルバイトをするんです」
「どんなアルバイト？」
「それは、ちょっと――」
と、北野は、いったので、岡田は、それ以上、突っ込んでは、きかなかった。
一五時五四分。列車が、城崎に着いた。
岡田が、温泉へ行くバスを探していると、北野が、
「歩きましょう。すぐですよ」
と、いった。

駅から、温泉地区へ向って、広い通りが、まっすぐ、伸びていて、立ち並ぶ旅館が、見えている。確かに、近そうである。
二人は、旅館街に向って、歩き出したが、並んで歩くと、岡田は、改めて、北野の背の高さに驚いた。岡田も、彼の年齢にしては、高い方だが、それでも、歩きながら話すのに、見上げる感じになってしまう。
「背が高いね」
「一八三センチです」
北野は、ちょっと、得意そうに、いった。三高（さんこう）といわれた頃から、若い男のもてる条件の一つに、背の高さがあるのかも知れない。
十分も歩くと、川沿いに広がる城崎温泉に着いた。
川幅は、四、五メートルと狭く、流れも早く

ないので、運河のように見える。その川の両側に、古びた旅館や、土産物屋が、並んでいた。
どれも、小さな構えで、温泉街全体が、ひっそりと、静かな感じがある。
よく、賑やかな温泉街だと、パチンコ屋や、ヌード劇場のネオンが輝いているものだが、それらしいけばけばしさは、感じられなかった。
川のところどころに架っている橋も、石造りで、どっしりと落ち着いて見える。
二人は、柳並木の下を、ゆっくり歩いて行った。時々、ゆかたがけの泊まり客を見かけるが、一様に、下駄ばきで、その下駄の音も、心地良かった。
旅館の並ぶ中に、射的屋があったり、クリーニング屋があったりする。
「私なんかには、こういう昔風の温泉街は、落ち着けるが、君みたいな若い人は、どうなんだろう？」
と、岡田は、歩きながら、北野に、きいてみた。
「僕も、こういうの嫌いじゃありませんよ」
と、北野は、いってから、
「僕より、若い連中には、物足りないかもしれませんね。だから、この城崎でも、車で、二十分ほど行った海岸には、近代的な水族館が出来ているし、大きなホテルもありますよ」
と、教えてくれた。
その水族館のある海岸には、沖の小さな島に、竜宮城も出来ていて、遊覧船も出ていると、北野は、いった。
「この城崎も、近代的になるというか、俗っぽくなるというか――」

「ああ、この旅館だ」
と、岡田は、足を止めた。
木造三階建、かわら屋根の小さな旅館に、「木村屋旅館」の看板が、かかっている。
「ここですか。僕は、この先の小池屋です。夕食のあとで、電話します。よかったら、外湯を、廻って歩きませんか」
と、北野は、いった。
城崎には、六つの外湯があって、観光案内にも、ぜひ、外湯を楽しみたいものだと、書かれていた。旅館で、石鹸（せっけん）やタオルを借り、ゆかたに下駄を突っかけて、廻って歩くのも風情があるだろう。
「いいね」
「じゃあ、電話します」
と、いって、北野は、更に奥に向って、歩いて行った。
岡田は、帳場で、女将（おかみ）にあいさつし、二階の部屋に案内された。窓を開けると、柳並木の道と、大谿（おおたに）川が、眼の下に見える。
ひとまず、旅館の風呂に入ってから、夕食をとった。窓の外には、夕闇が降りて、川沿いの街灯に、明りが、ともった。
外湯めぐりをする泊り客か、土産物屋をめぐる泊り客か、下駄の音が、聞こえてくる。
宿に置かれたパンフレットには、写真入りで、外湯めぐりの案内が、のっていた。
岡田は、北野の電話を待っていたが、いっこうに、かかって来ない。こちらから掛けてみようかと思ったが、連絡して来ないのは、何か、他に用が出来たのだろうと思い、遠慮することにした。

外湯めぐりは、一人ですることにして、旅館で、石鹸かごを借り、それに、タオルと、外湯めぐりの券を貰って、外に出た。

川沿いの狭い範囲に、六つの外湯が、かたまっている。

最古の外湯といわれる「鴻の湯」、美人の湯だという「御所の湯」、道智上人の祈願で湧き出たといわれる「まんだら湯」、開運招福で評判の「一の湯」、子授けの湯として女性に人気の「柳湯」、最後が、名水で有名な「地蔵湯」の六つである。

岡田は、三の湯まで入ったが、少し、のぼせてしまい、そのあとは、ただ、川風に吹かれながら、散策することにした。

旅館に戻ってから、岡田は、寝る前に、北野のいっていた小池屋という旅館の電話番号を調べてかけてみた。

向うの帳場につながったので、岡田は、

「そちらに、北野敬さんが、泊っていると、思うんだが」

「はい。泊っていらっしゃいます」

と、女の声がいう。

「部屋に、つないでくれませんか」

「まだ、お帰りになっていらっしゃいませんが」

「まだ？」

岡田は、腕時計に眼をやった。すでに、夜の十時半を過ぎている。

「何処へ行ったんですか？」

「多分、飲みに出ているんだと思いますよ」

と、相手は、いった。

（なるほどね）

岡田は、思った。岡田は、自分が、酒が飲めないので、つい、他の誰もが、自分と同じ時間割で、動いているものと、考えてしまう。

夜おそくなれば、テレビを見ながら、布団に入ってしまう。せいぜい、煙草を吸うぐらいしか、考えないのだが、あの北野という青年が、酒好きなら、まだ、眠る気にはなれないだろう。温泉街のバーか、スナックで、飲んでから、眠りたいと思うだろう。

岡田は、布団に入り、腹這いで、煙草を二本ばかり吸ってから、明りを消した。

2

翌四月九日は、朝食をすませてから、岡田は、カメラを持って、外出した。

温泉街の町並を撮って廻るつもりだった。

大谿川の橋をわたると、小さな公園がある。そこから、標高二三一メートルの大師山の山頂まで、ロープウェイがある。

公園兼駐車場には、団体バスが着いて、観光客は、まっすぐロープウェイの乗り場に向ってしまう。

公園の隅には、志賀直哉の碑があるのだが、それに気付く観光客は、ほとんどいなかった。

岡田は、その文学碑をカメラにおさめてから、ロープウェイで、山頂に、あがってみた。

低い山だが、それでも、城崎温泉が、眼下に見下せる。遠くに目を向けると、日本海まで、見えた。

志賀直哉の「城崎にて」を読むと、このロープウェイは出て来ないから、彼が、この城崎で、三ヶ月を過ごした時には、動いていなかったの

だろう。
　そんなことを考えながら、岡田は、山頂からも何枚かの写真を撮り、そのあと、北野がいっていた水族館に行ってみることにした。
　日本海を望む日和山（ひよりやま）に、最近造られた城崎マリンワールドには、温泉街とは明らかに違う客が、来ていた。
　温泉街には、中年の客が多く、北野のような若い客は珍しい。だが、こちらの城崎マリンワールドは、家族連れや、若いカップルが、圧倒的に、多かった。岡田は、北野も、ここに来ているのではないかと思い、千九百四十円払って、中に入ってみた。水深十二メートルという大水槽では、海の各層に棲（す）む魚の分布が、生きたまま見られるし、外で行われているイルカなどのショーも楽しかったが、北野はいなかった。
　昼食は、同じ日和山のレストランですませてから、バスで、温泉街に戻った。そのバス停から、少し歩いたところに、北野の泊っている小池屋旅館があった。
　帳場をのぞいて、そこにいた女将に、
「北野さんに、会いたいんだが」
と、声をかけると、小柄な女将に、
「北野さん、何処にいるんですか？」
と、逆にきかれてしまった。
　岡田は、わけがわからず、
「彼、ここに泊っているんじゃないんですか？」
「北野さん、昨夜から、帰って来ないんですよ」
「どうして？」
「そんなこと、わかりませんよ」
　女将は、怒ったように、いう。

「警察に、連絡したんですか？」
「警察にですか？」
「そうですよ。昨夜外出して、この時間まで、戻って来ないんでしょう？　何かあったのかも知れない。警察に知らせて、探してもらうのが当り前でしょう？」
「北野さんが、うちへ泊るのは、これで、三度目なんですよ」
「二度目じゃないんですか？」
　岡田は、首をかしげた。北野は、彼に、城崎は、大学時代に一度、来たことがあるといった。それなら、二度目のはずなのだ。
「三度目ですよ。去年の今頃と、一昨年と。来ると、必ずうちに泊って下さるんですけどね。夜になると、飲みに行ってくるといって、いつも外出なさってね。次の日まで、帰っていらっしゃらないことが、何回もあったんです。だから今回も、それかと思って、警察には連絡しなかったんですよ」
　と、女将は、いう。
「本当ですか？」
　岡田は、まだ、半信半疑だった。
　北野は、間違いなく、大学時代に、一度、城崎へ来ただけだといったのだ。それを信じれば、北野は、今、三十半ばぐらいだから、十年以上前になる。
　それなのに、女将の話では、ここ三年間、毎年、来ているという。
「本当ですよ。北野さん、いい人なんだけど、酒に飲まれてしまうんですかねえ」
「じゃあ、いつも、次の日になると、必ず、戻って来ているんですね」

「そうですよ。だから、あまり、心配してないんですけどねえ」
と、女将は、いった。

3

岡田は、木村屋旅館に戻ると、ボストンバッグから、山陰地方の観光地図を取り出した。
明日、ここを出発して、鳥取に向うつもりだった。前々から、砂丘の写真を撮りたいと思っていたのである。
夕食のあと、もう一度、外湯めぐりをしてみようと思い、石鹸かごとタオルを借りて、出かけようとしていると、帳場から、お客さんだと、知らされた。
てっきり、北野だと思った。向うの旅館の女将が、岡田のことを話したので、彼が遊びに来たに違いない。
階段をおりて行くと、玄関には、北野の姿はなく、見知らぬ男が二人、立っていた。
「岡田さんですか？」
と、片方の男が、きいた。
「そうですが」
「北野敬さんを知っていますね？」
その男は、決めつけるように、いった。
その喋り方で、岡田は、
（警察の人間ではないのか？）
と、思った。岡田自身、警視庁捜査一課で働いていた頃は、同じようないい方をしていたからである。
「彼が、どうかしたんですか？」
「死にました。殺されたんです」
「なるほど」

「あまり、驚きませんね？」
「いえ。あなた方が、警察の人間らしいとわかったので、予感みたいなものがあったんですよ」
と、岡田は、いった。
男は、険しい眼つきになって、
「なぜ、われわれが、警察の人間と、わかったんだ？」
「私も、昔、警視庁捜査一課の人間でしてね。あなた方の雰囲気で、わかったんです」
岡田が、いうと、男は、「へえ」という表情になって、
「岡田さんは、本庁に勤めておられたんですか？」
「もう、何年も前です。三十年も、刑事をやっていました」
「それなら、話がしやすい。われわれと一緒に、これから行ってもらいたいところがあるんです」
「死体の確認ですか？」
「そうです」
「すぐ、支度します」
と、岡田は、いった。
着がえをすませて、岡田は、県警のパトカーで、二人の刑事と、現場に向った。
車の中で、二人の刑事の名前も知らされた。年輩の方が、山下、若い方が、林という名前だった。
パトカーは、まだ、うす明りの中を、円山川（まるやま）に沿って、上流に向って走った。
円山川は、日本海に注ぐ川で、城崎温泉はその河口辺に生れた温泉といってもいい。温泉街

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。